随筆

経営の散歩道　一二八回

川中経営所長　川中清司

タイ小紀行　その4

ソンタム国王と繁栄

山田長政の実力を評価して貴族に引き上げたのは、ソンタム国王である。

王はアユタヤ王朝の第二十一代目で、父王以来、シャムの国政を安定させ外国との交易を盛んにし、とりわけ佛教の興隆に力を注ぎ、文学も栄えて、名君とうたわれた。

一六二三年に「佛足石」が発見されたが、これを祭る壮大な寺院を建て、人々の信仰を深め、宮中行事としての「仏足石参り」の伝統をつくった。

仏陀の修行中の物語を、韻文形式で説いた「マハーチャート・カムルワン」をあらわした。

仏陀が悟りを開くまでの姿を、ボーデイサッタ（菩薩）とか大士といい、タイの寺院の壁画や彫刻には、よくその物語が描かれている。

その物語「ジャータカ五四七話」の中で、最後の一番長い逸話が「マハーチャート」と呼ばれ、古くから最も重要視されている。

王はそれを親しみやすい詩の形にして普及をはかったのである。

日本とオランダの対立

王はアユタヤに外国人の居留地や商館の設置を認めたので、ヨーロッパの商人達はここを中継地にして各国との交易を広げた。

オランダは、一九〇八年に東インド会社の商館を設け、綿布を獣皮やコショウと交換し、中国や日本に売りさばいて大きな利益をあげていた。

しかし王は、日本との交流に力を注ぎ、次第に日本人勢力が強まるにつれて、その交易の実権が日本側に奪われ、両者の確執が深まっていった。

王の使節は、一六二二年・二三年・二九年と三回も日本を訪れ、日本からは、一九〇四年から三六年までの間に、五十六艘のご朱印船がシャムに渡っている。

王位継承めぐる内乱

一六二八年、ソンタム王は三十八才の若さで病没する。

シャムでは亡き王の弟が王位を継ぐ習わしがあったが、王は生前から、長男のジェッター王子に継がせたいと考えており、死に臨んでもぞの旨を言い残した。王に忠誠を誓った長政は、その遺志を守って王子を擁立するが、亡き王の弟のシーシン親王を建てようとする一派と激しく対立して内乱となる。

長政は軍を率いてこれを鎮圧し、王子が王座に就く。

しかし王位に野望を抱いていた宮内長官は、在位八カ月の若い王を殺害して政権を奪おうとする。

長政は長官を戒めて、摂政職にとどまって第二王子に王位を継がせるよう説得するが、長官は野心を捨てきれない。

六昆を鎮圧して王に

その頃、マライ半島の中央部・南タイの要地であるリゴール（六昆）に反乱が起こる。

一六二九年（寛永六）、長政はその六昆の王に封ぜられ鎮圧におもむく。

善戦のすえ六昆を平定した長政は、アユタヤから王妹や数人の美女をはじめ、金の王冠や数々の財宝を贈られる。

しかし、勝利の宴臨もうとするが、戦で負傷した足に塗った薬に毒が入れられていたため、数時間の苦しみの後あえなく一命を落とす。

日本人町の消滅

長政を毒殺させたのはオランダの陰謀という説もある。

日本とシャムの直貿で利益を奪われていたオランダは、その後は仲介貿易のチャンスを掴み勢力を盛り返す。インドネシアのバタビヤ（今のジャカルタ）に東インド会社の拠点をおき、東アジア全体の貿易の実権をにぎる。

長政の死後、その死因がはっきりしないということで、幕府の態度が硬化し、やがて鎖国となりご朱印船も止まる。

日本人町は急速に荒れ果てていき、十七世紀の終わりには完全に消滅する。

今は、かつての日本人町は公園になっている。あたり一帯は静かな水田で、のどかなタイの農村の真ん中にある。

公園の中には日泰協会が建てた記念館があり、剣を持って立つ山田長政の像が、訪れる人々にありし日の盛衰を語りかけている。